慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シモンド、ヅ、シスモンヂの生涯
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.4 (1910. 10) ,p.474(106)- 485(117)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101000-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

露人の知能も大分感情等と同じ傾向がある。推理の樣式は直線的根本的で幾多の事情幾多の方面等は考へない。一面のみを觀て熟視した積りで居る。之は愚なるが故では無くして國民の性情が複雜を厭ふて單純を喜ぶからである。截然として明白な解決を好むことは此國にて有名なる虛無主義の主張にも認められる。

先きに說明した如くスラヴ人は同化力に富むで居りまた模倣の能力も發達して居るが獨創の才は乏しい。同化力の盛なことは今日の露西亞を形成する上に甚だ重大な役目をなし、また一方には現はれて國人の有名な社交性となつた。併し模倣の點よりして直ちに獨創の才の無いものと斷定するは早計であらう。何せかといふに露國は文明の程度非常に他より遲れて居るところから特に模倣が必要であつたのかも知れぬ。そして然る上で始めて發明獨創の力が表はれぬとも限らぬ。心理學の研究によると模倣は發明の支持として用ひられる能力と認められる。

順序として如何なる偉人が此國から生れたかを檢して見たいが不幸にして多くの偉人の名に出遭くはさない。カテリナ二世は獨逸の婦人である。彼得大帝は母系はスカンヂナヴヤより父系は獨逸出である。トルストイもまた日耳曼出でうる。斯樣に考へると純粹のスラヴより出た偉人は無いやうであるが併し未來は何うして未知數である。

シモンド、ド、シスモンヂの生涯

高橋誠一郎

（六）

シスモンヂは此ヴルチユーザに於ける田園生活の間に獨り靜かにタスカーの農業に關する處女作の筆を運び、自由國民の憲法に對する研索に其勞力を傾注し、而して又伊太利諸共和邦の美しい歷史の稿を起さんとして其用意を怠らなかつた。

シスモンヂの父は艦て再びジエニーヴに歸ることゝ爲つたので、此ヴルチユーザの小農圃監督の任を其子に委ねた。農圃は十三年間の約束で正直な農夫の一家に貸附けてある。土地の收穫は此の山間の小農圃の間に行はれつゝある慣習に從ひ、穀物のまゝ二つに分割せられて持主と農夫と雇人とにそれ〴〵生活資料を給することゝ爲るのである。年若い新主人は能ふ限りの力を以て農事に盡した。田園裡の勞働は孰れも彼が心意の活力を益々增加せしむるの因と爲つたのみならず、農業の研究は又偉大なる敎訓を彼の智性に與へて常に新しく常に變じ常に興味ある觀察の効果多き源泉とは爲つた。

彼の自由濶大な心は不毛の瘦野、荒廢した曠原及び沼澤を次第に增加せしめつゝある伊太利の暴主等を非難することを禁ずるとが出來なかつた。彼は曰ふ、神は折角人間に恩惠を與へても人が其利用方法を知らぬ時は再び之を奪ひ返すの常であると。更に眼を轉じて水渠の設備を觀た彼は、之と反對に感嘆の聲を禁じ得なかつた。濁流滔々として水勢矢の如くなる大河は此水渠に流を瀉かれて、海に押流す可き泥土を此所に蓄積し、自然に拋棄して置いたならば徒らに其河口を埋めて不健全な濕地たらしむ可き筈の者を變じて之を豐饒なる沃野に改造してゐるのである。此技術は伊太利及び近く佛蘭西に於て往々地表を一新せしむるの効果があつた、而して彼は此土地改造の技術を行ふた幾多の基督宗派の努力に對して深く感謝した。

タスカニーの農業に關する彼の著書(Tableau de l'Agriculture Toscane)が初めてジエニーヴに於て出版せられたのは一千八百〇一年のことである。此書に於ける彼の筆は全く描寫的說明的である。シスモンヂは此書に於てタスカニーに於ける農業家が勞働の狀態や慣習風俗を平和な筆に描いて生々とした繪畫を讀者の前に示してゐる。之を以て其後等しく彼の手にものせられた落寞荒凉にして而も貧擔重き羅馬の四隣なるカムパグナの光景と比較すると其筆致の雄健銳利にして其著色の暗澹幽陰なる實に好個の對照を爲してゐる。當時の彼は

熱心なるアダム、スミスの學徒であつた。彼が一千八百〇三年等しくジエニーヴで出版した「商業上の富」(Richesse Commerciale) 二卷は這般の事實を遺憾なく示してゐる。彼は此巨大なる蘇格蘭の經濟學者を崇敬するの餘り、近くジエニーヴのカントンが其一州と爲つた佛蘭西に彼の學說の全部を悉く適用せんと試みた。此著に表れた彼は極端なる自由貿易の主張者であつて、盛んに獨占、關稅、殖民地の特權及び其他保護の目的を以てする諸制規に對して攻擊の矢を放つてゐる。彼の意見に從ふと是等制規的の法制は國家の繁榮を增進せしめんとの見解より出でゝ却つて之を妨礙しつゝあるものであると看做されてゐる。後年に至つて彼は自ら殆ど此書の價値を認めなく爲つた。彼は歷史の研究に因つて初めて純理的の抽象論から脫却することを得て社會の實態を觀ることが出來る樣に爲つた。人間を以て研究の對象とする科學は物質を研究する科學と同じ樣に硬直不變である可きものでない。自然科學の法則は其律し去らんとする作用が單純にして且つ一樣であるが故に常に不變のものであるが、複雜にして且つ變動常なき人間界の現象は單に變通的の法則を容るゝのみである。從つて萬物悉く一定の作用を爲す自然界に於て絕對的の原則が適用せらるゝならば、萬象皆連續循環し、現在の狀態は悉く過去の狀態より出でゝ然も之と同じからず、自利の觀念は理想と步調を共にして進む能はず、且つ風俗習慣の力は長く革新を沮止するに足る人間社會に在つては更に變通自在なる原則を以て其基礎と爲なければならぬ、而して其眞の効果は之を機宜に從つて愼重に適用するに由つて初めて得らる可きものであるとの念は次第に彼の胸中に强くなつた。

此當時シスモンヂの念頭に往來して居つた經濟學上の諸問題が其後彼の胸裡に釋然として解決せられた時、彼は大膽にも自ら英國學派の反對者であると宣言した。リカードの學徒も、マツカロツクの學徒も、セーの學徒も、其他總て人間の多數を以て單に將來彼等を壓潰す可き富の創造を行ふ機

械と看做す者に對する反對者であると聲明した。彼は當時聰慧なる觀察を下して小地主制度と大地主制度並に短期借地制度と長期借地制度の利害得失を估料判定せんとした。彼は地代を穀納とし(リヴエロ)終身借地の契約にて貸與せらるゝ大農圃、及び所有せずして用益し、毫も自己の貧窮を感せざる一の組合員(卽ち所謂メザヨオロ)に由りて耕作せられ其收穫の一半を借地料となせる適度の耕圃(ポデレ)に就いて研究した。青年は其心胸に端なく呼び起された複雜なる思想に我ながら驚駭して自ら問ふた。「多數の活動的にして然も貧窮なる人民は少數の懶怠にして然も富裕なる住民よりも更に貴いものではなかろうか。出精にして活動的なる家族の絕滅は國家に取つて大なる損失ではなかろうか。國家は果して貧民階級の疲弊の基礎の下に置かれた物質的利益を保護す可きものであろうか」。是れ實に「タスカニーに於ける農業」中に表れた一句である。

(七)

然しながら此商業上の富に關する彼の著書は兎に角江湖の注意を惹いてシモンド、ド、シスモンヂの名聲を著しく高からしむるに至つた。彼が此の著を出版してから間もなくヴイルナの大學は當時空虛に爲つて居つた經濟學の講座を擔任せしめんとして巨額の俸給を提供して彼を招聘した彼は其當時ジエニーヴに住つて居つた。之より先き一千八百年彼は聰明なる執政官政府の爲めに呼返されて玆にジエニーヴ商務院の祕書官を任命せられて居つた。斯く有利なる條件を以てした招聘は元より彼の心を動さしめた。殊に其窮乏の狀態は一層誘惑を深からしめた。然しながら彼は終に斷乎として之を拒絕した。自由を束縛せらるゝを恐れたのと、今一つは最愛の母の下を遠く去るに忍びなかつた爲めである。這個の交涉は一度破綻と爲つた後、再び開始せられた。而して此報知が終にヴルチユーザに達した時、シスモンヂ夫人の胸中には一波瀾を捲き起した。彼女は屢々書を其愛息に寄せて生先長き彼が前途の利害を打算して其身を

處せんことを泣いて訴へた。彼女は幾度か「幾多の外人、學者竝に文豪等が歐羅巴の他地方よりも特に北方に於て優遇せられ、其前途の運命を開拓し、幸福なる結婚を行ひ得たること」を再三繰返した。然しながら彼は終に母の意に從つて遠く去ることを肯じなかつた。

シスモンヂは今や佛蘭西の一市民と爲つたのを機會として一時官吏の生活に身を委ねて實際上の政務に其手腕を試みんとの野心を蓄へた、けれども シスモンヂ夫人の切なる反對は終に彼をして此計畫を思ひ止らしめた。彼の母はシスモンヂ自身よりも遙に能く其愛兒の爲人を知悉して居つた。彼は徹頭徹尾學問の人である。人道の健鬪者である。其思索家的の熱誠、隱遁者流の態度飽くまで正義を愛し、非理に組みせず、頭腦極めて透徹明晰にして然も資性高潔なる彼は變轉極りなき官界を游泳し、政爭の渦中に身を投じ、世と共に押し移つて次第に高き地位に昇り行くが爲めには彼は餘りに確固たる信念の上に座し、餘りに自己を信ずること深く、且つ餘りに多量の血と涙とを有して居つた。彼は遂に思索の人である。到底複雜多岐な政界に身を處す可き人でない。

愛の力は克く彼の母をして其子が天稟の資質を洞見せしめた。彼女はシスモンヂに切に歴史家たらんことを說いた。彼は其勸告を容れた。歴史は元より彼の愛好する所である。殊に彼の胸中には一千七百九十六年卽ち彼の一家がペスチアに居を移した翌年から著手して既にタスカニーの田園生活中に其一部を脫稿した「自由民の憲法に關する研究」(Recherches sur les Constitutions des Peuples libres)を完全せんとするの意志がある。此書の第一卷及び第二卷は自由及び政府に關する彼の意見を論究するを目的とし、次ぎに第三卷には英國憲法、第四卷には佛蘭西の共和政府、第五卷には西班牙昔時の諸憲法、第六卷には伊太利諸共和政府の分析解說を試み更に瑞典、波蘭、ハンザ都市、竝に北米合衆國に就きても一と通り觀察を下さんと試みつゝあつたのである。純理的の研究は

最早從來の如き大なる歡迎を受けなくなつた。純理の時代は既に過ぎ去る可き運命に遭遇しつゝあるが如くに觀える。歴史的研究の時代は既に來りつゝあるのである。

あらゆる國民に就きて觀察するに歴史は實にあらゆる思想界の產物中其最も新しいものであることを示してゐる。恰も叙事詩が一國民の少年時代に先づ現れる想像の勝利である如く、歴史は其智性が成熟期に到達した時代の事業である。優れた歴史を著さんが爲めには先づあらゆる事物に對して自由なる判斷を下すの權利を有し、能く事の實相を知悉し得るの地位に立ち、善く其內容を洞察し得るの狀態に在ることが必要である。然れば卽ち眞個の歴史は開明な時代、自由の邦國を除いては決して存立することがない。眞の歴史を記述す可き巨擘大匠を產んだものは自由の邦家と獨立の思想に保護せられ、赫如たる智性の光に啓蒙せらるゝと共に幾多の重大事件に敎育せられた彼の亞典、羅馬、フロートレンス、英吉利及び佛蘭西である。斯くの如く歴史を生ずるに適應した諸般の事情は今又新たに到達した、而して這般の事情は更に擴大しつゝあるのである。哲學上の革命は歴史家の推理をして更に深酷ならしめた。政治上の革命は更に之をして自由ならしめた。科學の進步は事實、時代、場所、人物竝に制度に關しゝ更に完全なる智識を彼に與へた。半世紀に亙つて彼の爲めに蓄積せられたる幾多の有益なる事件、一度棄てられて複た回復した信仰、一度破壞せられて復た建築せられた社會、人民の過剩、偉人の失墜、政府の顚覆、征服の驚く可き事變、侵略の災殃は孰れも皆效果多き經驗と爲つた。最も擴大せられた戰爭の後に來つた最も長い平和、竝に理想の實現に憧憬れた熱烈の時代に亞いだ現實的利益崇拜の冷靜な時代は人間社會の現象の相異れる方面を彼に示してあらゆる彼の前驅者が爲し得たよりも更に深く歴史の祕奧に穿入して其機微を洞見せしめなければならなかつた。彼の利用し得る資源の增加すると共に彼が斯學上に於ける責任も亦增大

す可きである。前代の精神を會得せんが爲に現代の精神をよすがとし、斷案の確實と共に叙事の忠實を計り、其發生の原因に遡つて事件の結果を表明し、あらゆる過失は必ず其責罰を伴ひ、あらゆる攻擊は必ず復仇を喚起す可きを示し、人をして諸般の行動を爲さしむるに當りては如何なる程度まで人間の精神的自由を立證す可き個人的意志に基き、如何なる程度まで隱れたる攝理の指導の下に窮極の大目的に歸向す可き人間本性の一般的法則の作用に基くやを指示するは正に時代が彼に與へた使命である。斯くの如くして歴史は初めて情趣に富んだ光景と爲り、有益なる科學と爲り、而して又人間社會の戲曲と爲り、教訓と爲るのである。

シモンド、ド、シスモンデは他に卒先して此新潮流に棹差した者の一人である。自由なる邦國の憲法に對する彼の研究は中世紀に於ける伊太利諸共和政府の其性質とを各相異れ等しく變轉極りなき趣味ある歴史に親炙せしめた。斯くして彼は未だ何人も手を下さず、殆ど一般に知悉せられざる至難の業に自ら當り是等諸邦の歴史を探究せんと努めた。伊太利の歴史は其繁榮を極めたことに於て將た又悲運の極に陷つたことに於て他の孰れの歴史よりも卓越してゐる。伊太利は一は羅馬帝國の下に一は法王朝の下に二度全世界を征服し統一した。伊太利は其勝利と領土とを失ふて無限の强大と鞏固な結合の極點から急轉直下して屠弱と分裂の奈落に墜つた。順次に未開國民や大陸の武斷的王國の首長の爲めに侵略せられた。然しながら伊太利は尙ほ優に六世紀の間、あらゆる征服者に對して勝利を贏得するの力を具へて居つた。分裂解體の間に再び邦家を樹立することが出來た。幾多の共和邦は斯くの如くして建築せられた。就中有力なる邦家と爲り得るものも少くなかつた。半島住民の間には祖先より傳つた嘆美す可き血が流れて居る。彼等が天禀の才華に依つて伊太利は武力に於てこそ貧弱なれ、尙ほ克く精神的に歐羅巴を支配することが出來た。中世紀を通じて永く最も殷富な國として、思想界の中心として、藝術の淵叢として、最も重大なる活劇の演出せられた舞

臺として、將た又最大なる人物の鄕土として世界に重要なる地位を占めて居つた。

伊太利は當にシモンド、ド、シスモンデが該博なる智識と莊重華麗なる筆致とに由りて描き出さる可き好箇の題目である。彼は先づ羅馬帝國や封建的權力の敗墟の上に昂然として共和政府を建築した諸都市の起源に遡つて其筆を起した。彼は是等の都市的國家の憲法を說明し、內部の社會生活を描き、其苦鬪を叙し更に其最後の狀を寫し出した。躁暴不穩なるジェノア、勇敢なるミラン、悲慘なるピザ、愼重にして權威あるヴェニス、民主的なるフローレンス其他幾多の都市的國家は孰れも其地域は狹少で其存在の時期は短かかつたがあらゆる大陸の王國に比して遙に其生活には活氣が有つた、人を醉はしむる情熱が有つた、而して更に變轉極りなき歴史を有して居つた。彼等は遲速の相違こそあれ皆野心勃々たる橫領者の爲めに滅亡した、是れ蓋し彼等が餘りに自由であつたが爲めである。然らざるものは外國の攻擊の爲めに亡びた、是れ實に彼等が餘りに屠弱であつたが爲めである。斯くの如きものは實にシモンド、ド、シスモンデの手に描寫せられた長く而して偉大なる歴史である。彼は博い智識、高尙な精神、勝れた才氣、精妙なる技術、樣大なる筆を以て之を描いた。彼の筆に成つた文字の一言一句趣味津々たるを覺えしむるものは蓋し彼自ら大なる感興を以て筆を執つたが爲めである。彼は單に事件の眞相を叙述したのみならず、之に對して斷案を下し、且つ自ら之に由つて動されてゐる。吾人は彼の書を繙く毎に彼自身の心が紙上に躍動しつゝあるを覺ゆるのである。勃々たる生氣は何時しか吾人を捕えて等しく史中に同化し去るのである。彼の彩色は自由である。彼の思想は明かである。伊太利の歴史其物が本來不統一である上に、シスモンデも亦充分なる統一を其著に於て示すことが出來なかつたに拘らず、伊太利の詩人アリオストーの歌曲に見るが如く、再び新たなる叙述に恍惚として耽讀するまでは既に吾人が離れた叙述に名殘惜しさを感

じつゝ、次から次と讀み進んで我れ知らず一氣に全篇を讀了せしむるのである。

シスモンヂは目にも止らぬ程の速度を以て「彼が百千の惰眠に耽つた王國に比して遙に大なる氣力、激烈なる情熱、稀有な才能、崇高な德性、賞贊す可き勇氣竝に其の偉大を發揮し得たものと認めた平等獨立の國家の紛糾錯雜した迷宮とも云ふ可き」中世伊太利諸共和政體の歷史(Histoire des Républiques Italiennes du Moyen—Age) の發端に筆を染め或は又其稿を改めた、各個の都市的國家に就いてそれ〴〵其晦冥な編年史を仔細に研究することは幾代掛つても完成することの出來ない最至難の事業たるの觀があつた。從つて未だ此紛糾混亂した記錄を仔細に研究するの勇氣を有して居つたものはない。然るに彼は今や自ら進んで是等數個の歷史を自己の手に束ねて唯一の見地に之を結合せんと企てたのである。

彼が此書の緒言をネッカーの令孃にしてホルスタイン、ステール男の令閨なる彼の有名なるステール夫人の爲めに朗讀した時、彼女は非常な滿足の色を以て之れに耳を傾けた。彼の母のシスモンヂ夫人も亦滿足を表したが其賞讃の詞と共に細心の注意を與ふることを忘れなかつた。母は兒に書を與へて云ふ「苟めにも口を開くと共に直ちに怒號したる彼の一千七百八十九年に於ける理論的煽動家の亞流を學ばざる可きことを努め給へ。熱誠は徐々に發生し來らざる可らず。爆裂を見るの前に灰燼に埋れたる火を認むるは心よきものにて候。而して急激の言を弄せずして徐々に之を說服するの態度に出ずるは却つて讀者をして自ら進んで著書の意見に一致せしむる所以に候」云々と。

然しながら此の青年史家の筆が次第に進んで深く暗黑な記錄に入つた時、彼の得意は忽ちに消えてシスモンヂは自ら氷結した如くに感じた。彼の父や祖母は其歷史の第一章を讀み聽かされ時、冷然として殆ど何等の感興をも惹かなかつた。緒言に感心したステール夫人は此に至つて全く乾燥無味で毫も生氣を有して居らぬと評した。著者は不

撓不屈の精神を以て鋭意其筆を進めつゝあるのであるが、其研究の困難は步一步と次第に加はりつゝあるが上に出版者を見出すこと能はざるの事實は一層彼の失望と苦痛を深からしめた。青年の胸中には恐怖の念が簇々として生じた。彼は先づ其新生涯に入ると共に自己の能力を疑ひながら唯だ僅に儚ない名譽心と生活の必要に駆られて心苦しくも筆を運ばしめつゝある貧しき作者の痛しい奮鬪を經驗し盡したのである。

「果して我は史學者たるに必要なる才能を有しつゝありや」との問を自ら發するを禁じ得なかつた全然意氣の消沈し終つた彼は其日誌に下の如き苦言を述べて居る。「現在及び將來より引き離されて吾が生涯は何等の聯絡なき瞬間の唯だ徒らに連續しつゝあるに過ぎず。吾は單に不斷の苦痛に由りて其生存を認め得るのみ」と。而して其極終に熱病の襲ふ所と爲つて病床に横はつた時、須臾其書中に最も力ある助言と最も優しい情の籠つた奬勵の語を寄せて彼を訪ひ慰めた母の心をも忘れて彼は此病より長へに癒ゆることなくして、其身を終らんことを願つた。

（八）

一千八百〇三年に著手した伊太利諸共和國の歷史十六卷は一千八百十八年に至るまで完成を見ることが出來なかつた。シスモンヂが辛じて其大著の一、二兩卷を印行することを得たのは一千八百〇七年のことで、ツーリッヒのゲスナーと云ふ人の手で佛獨兩國語を以て出版せられた。此出版の成功は續稿の上梓を容易ならしめて、翌一千八百〇八年第三卷及び第四卷は出版せられた。一千八百〇九年ゲスナーが死去したので、巴里のニコールの手で既刊の四卷を再版すると共に、更に五卷より八卷までを出版せしむることとした。次で一千八百十五年に至つて最後の五卷卽ち十二卷より十六卷までをツロイテル及びヴルッの手で出版せしめた。

此十五年間は勤勞の內に消えた。彼の著作と之れに對する熱心とは其の最大なる事件であつた。

然しながら彼は此間にジャック、ネッカーの知遇を受けて、一千八百〇三年以來屢々其コッペの別業を訪れるととなつた。此別業には絶代の才女たるステール夫人の力に由つて常に爽快な空氣が滿ちて居つた。彼は此所で溫厚なペンジヤマン、コンスタンや有名な瑞西の歷史家ジエアン、ド、ミユラーや博學な批評家シユレーゲルと會合し、比較解剖學のキヽヴエーと相識り植物學者のデー、コンドルにも紹介せられ、其他此別業を訪問する巴里及び其他歐洲各地の最も著名な人物を見ることが出來た。此所に彼を圍繞するものは孰れも一流の名士才媛である、優れた頭腦は相互に必用なる思想の交換に由つて將た又愉快なる偶然の論爭に由つて益々富贍と爲り精良と爲るものである。シモンド、ド、シスモンヂは此別業に於て有力なる助言を受けた、彼は此著明な博學な人々との交遊に由つて大に得る所があつた。彼の思想の內には更に多數の題目を抱擁するに至つた。而して彼が過去の產物中には不滿の點多きことを愈よ痛切に感じた。

彼は啻に是等の有力な助言を得たのみならず、其書齋の勞苦は少なからず此華やかな交遊の爲めに慰安を受けた。コッペに遠足を試みたシスモンヂは往々此所に數日間足を止め、或は更に氷河に旅行を試みなどした。ステール夫人の流暢な快辯や彼女が其周圍に吸收し得た一粒選りの交友は長い坐業の倦怠を醫することが出來た。

度重なつたコッペ訪問も毫もシヤールの出精を障げるとが無かつた。彼は孜々營々として修史の筆を運んでゐる。其著述の進行する有樣は善く母の書簡に表れてゐる。母は絶えず此書の種々なる點から刺激せられた感想を述べて其子に助言を與へてゐる。苟も中庸を失はない靜平なる心を以て經驗に乏しい青年に有勝ちな獨斷的な意見、背信の態度並に懷疑の傾向を訓めてゐる。彼女がシスモンヂに與へた書牘の一節に「現代の人士が其享得しつゝあるあらゆる幸福の基礎を爲せるものなりと思惟せる思想を徒らに攻擊する者の一般人士の爲めに憎惡を受くるに至る可きは毫も怪むに足らざることにて候。假令其思想は誤りなりとするも、然も長く信ぜられたる誤謬は吾人が之に代らしめんとするものよりも更に尊敬す可きものに候」と云ふ一語がある。吾人は最も記憶す可く味ふ可き文字であると思ふ。

（未完）

芬蘭憲法

芬蘭（瑞典語にてFinland芬蘭語にてSuomiと稱す、）大公國は曾て瑞典國の一部を構成せしが、一八〇九年九月十七日にFredericksharvnの條約を以て露國に併合せられ、瑞典王はその規定に於てすべての權利を擧げて之を露帝に讓與したり、この條約の締結に先ち芬蘭の諸階級はBorgoに國會を開きて露帝と協約する所あり、露帝は芬蘭大公として承認せられ、之に對して一八〇九年三月二十七日大公國の憲法を確認したり。爾來歷代の皇帝皆之を追認せるが故に大公國は露國と元首を等うし、外交を之に委ねたるのみ、但し、人民は露兵の舍營を拒むを得ず。一八七七年三月二十五日の法律は一八八一年より實施せられ、君國防備の爲芬蘭臣民に兵役の義務を課したり。但大公國には議會の設あり、その政府も亦獨立せり、然るにニコライ第二世卽位前後より芬蘭に對する露化政策著々として實施せられ、一八九九年芬蘭の陸軍を露國の陸軍に合併する法を定め、同二月十五日の詔勅を以て芬蘭の立法制度を改革して議會の權限を縮少し帝國と共通の立法は將來之が協贊を要せざるととなし、その後、日露戰役の影響を受けて九百五年十一月四日一旦大に讓步する所あり、九百六年七月芬蘭は普通選擧に基ける一院の議會を設けたりしも本年に入りて愈よ芬蘭の享有したりし從來の特權は剝奪せられたり。六月十日芬蘭法案の露國議會に於て採決さるゝや在野黨議員は連袂缺席し、反對の投票を爲せしは十月黨員二十三人に過ぎず贊成百六十四票を以て可決せられ、議場